

オープンキャンパス参加者の交流を 活性化するための指導プログラムの検証

勝 田 み な

摘要：本研究では、オープンキャンパスにおいて、参加者同士の交流を活発にし、学生サポーターや教職員、卒業生などと協働して交流を深めるための指導プログラムについて検証した。その結果、体験授業の展開を工夫する必要があることが明確になった。保育者は、対象が幼児であるため安易にできると考えるのではなく、人間形成の大事な時期にかかわる職業だからこそ、真摯に学ぶという姿勢を鮮明に自覚させる必要があった。今後の課題は、オープンキャンパスへの参加者増をめざし、本学の知名度を上げるための明確なプランを今一度再検証していくことと、参加者の興味や関心が高かった体験活動場面とともに保育の理論面も学ぶプログラムとキャリア教育を考慮した体験授業の取り組みを実施していくことにあると考える。

キーワード：オープンキャンパス 交流 体験授業 保育者

I 研究目的

1. 研究の動機と背景

近年、18歳人口が減少している。内閣府⁽¹⁾の調査では、平成4年度が約205万人でピークを迎え、平成27年度は約120万人であり、しかも平成24年度から平成32年度まではほぼ横ばいで推移している。18歳人口の減少に伴って大学入学者数を確保するために、各大学はあらゆる手立てを考えて、学生募集のための広報活動に精を尽くしている。高校生の進学意識調査結果⁽²⁾では、「大学選びの情報源として71%がオープンキャンパス」と回答している。また、「オープン

キャンパスへ行った際、『大学の様子・雰囲気』、『施設・設備』が重視するポイントとして 91% 以上が回答」している。このような回答からも現地で実見したいという希望が強いと考えられる。

せっかく入学したのだから、将来の夢を見据えて学びを深めてほしいし、資格取得を目指すのであれば、ぜひとも仕事につながるように活かしてほしいという願いのもと、入学後の自分自身の進路を明確にさせる必要もある。そのためにも、入学前に行われるオープンキャンパスは、受験生自身の主体的な参加だけではなく、高等学校等の教員や保護者などにも参加を促している。

日本の大学でのオープンキャンパスは、1990 年代後半頃から一部の大学で開催されるようになった。これは、少子化を背景に受験生を確保したいという目的のもと、入学を希望・考慮している生徒等に対して、施設を公開し学校への関心を高めるためのイベントとして参加者からの見学・体験・相談である。その後 2000 年代になると、いわゆる難関校と呼ばれる大学においても開催されるようになった。これは、入学してから円滑に高等学校等から大学への移行が進むように、ミスマッチを防ぎたいという意図から行われている。

また、オープンキャンパスと明言していなくても、大学施設の見学や相談などを随時受け付けている場合も多く、普段の大学の様子を学内に入って見て回ることを認めている大学もある。オープンキャンパスの目的は、大学の特徴を明らかにし、キャンパスライフに触れさせることにある。参加者は、大学の雰囲気を知ることによって進学先を決める機会になる。

本学のような短期大学（以下、短大）は、社会に有為な人材を送り出す身近な短期の高等教育機関である。地域社会を支える職業人材の育成によって、地域の発展に寄与する役割を果たしている。短大卒業生の占める割合が圧倒的に多い幼稚園教諭と保育士においては、他の学校種にはない、汎用的な職業能力を育む短期大学士課程の特長が、就職時や職務活動上における卒業生の評価につながっていると考えられる⁽³⁾。地域に根ざした短大（地域に密着した高等教育機関）として、地域の活性化につなげられることから、本学の学生には、地域や園への信頼を得て、人間形成の大事な時期にかかわっていく職業を選択したという責任と学ぶという姿勢を鮮明に自覚させる必要がある。そのためにも、本学は幅広い人間教育の実現に向かっていくことが大切であろう。

2. 先行研究の検証

オープンキャンパスを一過性のイベントやブームだけとして位置付けず、先行研究ではどのような視点から研究がなされたのかを検証し、体験授業を中心とした参加者の交流を活性化するための方法等について焦点を当ててみた。

池島ら⁽⁴⁾は、「演習体験の目的は、オープンキャンパス参加者と教員や在学生在が交流しやすい環境をつくり、…（中略）… 個々の学生に対するきめ細やかな指導と学生主体の活動が盛んであることを体験的に理解してもらうことを目的に演習体験を導入した」と述べ、オープンキャンパス参加者に対して、「どのような方法で学校の魅力を最大限に表現するかを考え実践するのは現場の教員の役目であり責任である。」と指摘している。橋本ら⁽⁵⁾は、「学生が中心となって企画・

運営するオープンキャンパスは、その活動を通して学生の社会性や自主性が育成される。」と述べ、大学教育としてのインフォーマルな学びの場としてオープンキャンパスを位置付けてきた。

また、古閑⁽⁶⁾は、「オープンキャンパスへの父母らの参加が増えており、本学で何を学び、何を得るかなど親子で関心が深いことがわかった。」と述べ、参加者の顔ぶれが変化するとともに大学としての対応も参加者のニーズに合わせていく必要を伝えている。小山⁽⁷⁾は、「来場者からいただいたお褒めの言葉やうまく対応できなかった事例などを共有することでさらなる成長につながると考える傾向があることも支持され、サポーターを支える職員の方々も同じ考えを持ち備えていることも検証された。」と述べており、大学教員だけではなく、サポーターズ(本学では「学生サポーター」と称す)や職員との連携、協働が重要であることを明らかにさせた。

さらに、小島⁽⁸⁾は、「奇抜なプログラムで受験生の関心を引き、参加者を集めるのではなく、原点に立ち返って自大学の教育、社会的存在意義や役割を見直し、それを受験生にしっかりと伝えていくことがオープンキャンパスのもつ役割である。」と指摘し、過剰なサービスで来場者をもてなすような内容に変わりつつあるオープンキャンパスのあり方について考察している。

これらの知見を踏まえ、大学教員としての重要な位置づけでもある体験授業での参加者とのかわりについての指導プログラムを構築していく方法を検証していきたい。

3. 研究目的

オープンキャンパスではカリキュラムの特徴はもちろんのこと、充実した学生生活を過ごせるような体制が整備されていることを伝えている。特に、子ども学科へ入学を希望している参加者には、カリキュラムや行事の具体的な内容として、地域の児童館や保育所などでのボランティア活動や、地域の子どもたちを本学に招いて、発表会を開くなど、地域社会との関わりを積極的に深めていることも伝えている。

保育者は、ただ単に子どもが好きだからという理由だけでは、到底勤まらない職業である。確固たる自覚を持たせるためにも、オープンキャンパスの体験授業プログラムは重要である。プロの保育者をめざすために、本学での学びを楽しく体験しながら、保育に対する情熱や夢を考えさせていくには、どのようにオープンキャンパスで伝えるのがよいのかを考えていくべきである。

そこで本研究の目的を二つの側面から考えてみた。一点目は、オープンキャンパスにおいて、参加者に保育の魅力を知ってもらうために体験授業に参加し、そこで参加者同士の交流を活発にする。二点目は、学生サポーターや教職員、卒業生などと協働して参加者との交流を深めるために指導プログラムの効果について検証する。

II 研究方法

研究の対象者は、オープンキャンパスに参加してくれた高校生や受験生、その保護者である。

また、参加者だけではなく、学生サポーターやゲストスピーカーとしての卒業生も対象者に含まれる。学生サポーターは希望者を募り活動させている。平成 27 年度は本学 3 学科で約 80 名の学生が登録している。これらの学生には各回のオープンキャンパスにおいて 15～20 名体制で担当させている。ゲストスピーカーとしての卒業生は第 1 期生（女性 1 名）に、幼稚園教諭（3 年目）としての体験談を中心に話をさせた。体験授業の流れとしては、筆者とのインタビュー方式で行い、参加者が保育に興味を持てるように、また、卒業生自身が自分自身をふりかえるきっかけになるような質問をした。その後、参加者からの質問にも答えさせ、体験授業内で終了できない場合は、ランチタイムで参加者と食事を共にして、終始和やかな雰囲気の中で卒業生とのコミュニケーションを取れるように進めた。

対象期間としては、平成 25 年度～平成 27 年度の 3 年間のうち、筆者が体験授業を担当した 13 回のうち 3 回についてである。方法としては、観察法、インタビュー、アンケート内自由記述である。

Ⅲ 本学のオープンキャンパス

参加者には、本学をまず知らせる必要がある。本学 N 短大の教育理念⁽⁹⁾は、「職業教育を通じて、豊かな人間性と技能を育み、社会貢献し、社会とともに幸せな生活を営むことのできる人材を育成する。」とし、教育目標⁽¹⁰⁾は、「学生が自ら考え行動し、自立することをめざして『学生が主役の教育』を実践するとともに、現代社会の求める理想と現実 に即した専門教育を教授研究し、自主性豊かな人材を育成すること。」としている。また、常日頃「愛情教育」と「実践教育」⁽¹¹⁾を語りかけている。「愛情教育」とは、学生の自立を促すための根底にある「思いやりの心を養うこと」を大切にすることであり、この気持ちを忘れないよう、心豊かな学生生活を送ることをめざすように、教職員全員でサポートを継続している。「実践教育」とは、就職率 100%の実績を続けていることからわかるように、インターンシップ、実習、就労体験に力を入れることである。

筆者の所属する N 短大子ども学科では、保育者をめざして日々学修に力を入れている。系列の幼稚園、保育所と連携を取りながら実習活動を行ったり、地域の保育所や児童館などで体験活動を行ったりしている。学生は、体験活動や実習をとおして、働くことの大切さや意味を学び、保育者として社会に出て、さらなる期待に応えようと、日々努めている。将来の目標を明確にし、夢や希望の実現をめざして学んでいる。

本学の 3 学科教員は、他学科の学生の名前を覚え、気軽に声をかけたり相談事に乗ったりしている。学生と教員の距離が近いのが大きな特徴のひとつでもあり、オープンキャンパスにおいても参加者への対応は、それぞれの教員の持ち味を活かすとともに、入試広報室の職員を中心に全教職員からも手厚いサポートを行っている。

オープンキャンパスプログラム構成は、「キャンパスツアー」、「個別相談」、「在学生との話し合い」、「授業や実習体験」、「学食体験」、「入試の説明」、などである。開催時間は 10:00～15:00 であるが、途中参加もできる。

また、オープンキャンパスに参加できない場合を想定して、学校見学は毎日行っている。オープンキャンパス参加は、高校 3 年生に限らず、1 年生・2 年生、既卒者、社会人など幅広く参加者を募り、保護者の参加も歓迎している。オープンキャンパスの体験授業では、医療事務・観光・英語・美容・癒し・健康スポーツ・介護・保育など多様な体験授業が計画されており、目的の授業に参加することはもちろんのこと、本学では、入学後、他学科履修を行うことが可能なので、オープンキャンパス時にも興味のある授業を受けることも可能である。夏祭りや大学祭などの学園行事とオープンキャンパス同時開催の時は、通常のプログラムを変更する場合もある。行事との同時開催では、地域をはじめ学内を広くアピールし、学内を開放する機会であるため、オープンキャンパス参加者も主体的に参加できる絶好の機会である。このような特色を広く参加者に知らせることも大切なことであると考ええる。

以上のように本学では、教育理念にかなうオープンキャンパスを毎回開催している。参加者の入試につなげる点から考えても、オープンキャンパスは重要なポジションであり、参加者にとって入学後の学生生活に対しても影響が大きいと考える。

池島、横井、岩井ら⁽¹²⁾は、「体験授業は短時間で学びやすくインパクトのある演習項目をより多く体験できるプログラムを計画した」と述べているように、参加者が積極的に体験できるようにするためにも、どのような内容で体験授業を行うか吟味する必要がある。

毎回のオープンキャンパスは、全教職員が共通意識を持って取り組んでいるが、学生サポーターの育成にも力を入れている。学生サポーターのかかわり方によって、オープンキャンパスの印象度が変わる場合があることが理由のひとつである。学生サポーターは参加者と年齢が近いため、参加者が本学への親しみを感じてもらい、オープンキャンパスの経験を活かして学生生活を送りたいと感じさせるためにも、学生サポーターの位置づけはとても大切である。態度が良好でない学生サポーターがいれば、そのまま本学のレベルが低いと思われてしまい、イメージダウンにつながりかねない。小山⁽¹³⁾は、「オープンキャンパスではサポーターズが案内役としての任務を担っているが、彼らの対応や受け答えが生徒らに与える影響は非常に大きいのではないか」と述べ、大学側としても学生サポーターの成長を促すような指導方法を考えていく必要があり、彼らへの指導は大学教育のひとつとして忘れてはならない点である。本学においても学生サポーターの対応の必要性から、教員がオープンキャンパスの開催される前に学生サポーターへ参加者への対応や受け答えの仕方などを指導している。

オープンキャンパス当日には、高校生等や受験生が積極的に参加できるように、最寄り駅までの送迎バスの運行、遠隔都市からのバスツアー、ドリンクの配布、スタンプラリーを行い記念品の配布、アンケート回収時の記念品の配布などのイベントも行っている。

IV 結果

1. 体験授業

筆者は現在、専門教育教科「生活」（以下、「生活」）を担当している。「生活」は、幼稚園教諭免許（Ⅱ種）取得と小学校教諭免許（Ⅱ種）取得には必要な教科であり必修科目である。「生活」は、文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』⁽¹⁴⁾の中で、「気付き」の定義を「気付きは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには、知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。また、気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。」としている。これは、一般的な「気付く」という範囲を超え、直接体験をくり返したり他者とのかわりを深めたりすることで、自分自身が主体的に自発的に活動することによって、思い、感じ、考えることが欠かせないということにつながる。オープンキャンパスの体験授業をきっかけにして、「生活」の目標にもある「気付く」ことの大切さを知らせるよう常に話している。

参加者の大半は保育者を希望して進学してくるので、まずは、参加者同士の「コミュニケーション」が円滑に進むように授業では構成的エンカウンター（SGE）を取り入れている。その理由として、体験授業で一緒になった参加者たちはいずれ大学でも同様に学ぶことになるので、オープンキャンパス時から親しくなれるように、体験授業内においてもコミュニケーションを取り合うことが必要だからである。このような「気付き」を、体験授業内に多少なりとも感じさせる授業を展開する必要があると考え、平成 25 年度には「先輩幼稚園の先生のお話を聞こう」、平成 26 年度には「ようこそ、夏祭りへ」、平成 27 年度には「雨の日の楽しい過ごし方」を行った。その上で、保育者の仕事内容と本学の特徴を盛り込む内容にした。古閑⁽¹⁵⁾は、「講義の魅力、教職員や在学生の指導力や人間味を伝える絶好の機会となる」と述べ、体験授業をととして教員の研究や学生への教育方針などを伝えたいと、保護者の興味関心も引きつける必要があるものと考えた。また、参加者同士が共通に体験することで、お互いのことを少しずつ理解し、連絡を取り合ったり、次のオープンキャンパスへの参加を約束することになったりすることが多いため、入学前からの活動が重要である。

体験授業ではニックネームを取り入れた。本名と違いニックネームを語ると自分自身を客観的に見ることができ、日常、言えないことや思っている意識的に思わないようにしていたことも話せるようになるものである。ニックネームを取り入れているのは、片野⁽¹⁶⁾の言う「ペンネーム」に由来する。「ペンネーム」のねらいは、「自分で自分に名前をつけ...（中略）...主体的に生きることを表現する」としている。「生活」の授業でも「ニックネーム」を付けて授業展開をしているのは、「素の自分を出せる」ことが肝要なことと考えるからである。

以下に、平成 25 年度から平成 27 年度までの 3 年間の体験授業「生活」の実践について、報告する。

(1) 平成 25 年度

平成 25 年度は、筆者が担当した体験授業は 4 回である。そのうち、「先輩幼稚園の先生のお話を聞こう」では、本学第 1 期生の卒業生（私立幼稚園勤務）に参加者へ幼稚園の仕事内容を話させた。

体験授業の目的は、卒業生からの体験談をとおして、将来の保育者像を思い浮かべ、夢と希望を持つ（将来願望）であった。内容は、第 1 期生の卒業生が幼稚園教諭として働いているので、その卒業生の体験談を聞き、仕事内容の紹介とともに参加者からのインタビューに答えた。

まず、授業者（筆者）と卒業生の自己紹介から始まった。導入は毎回 SGE のエクササイズを取り入れた。将来願望がねらいになる体験授業を進めていく方法として、卒業生へのインタビュー方式で進めた。卒業生に対して筆者が問いかけて、答えさせた。質問はあらかじめ卒業生に伝え、回答を準備しておくように依頼した。授業の後半では、参加者からの質問に答える形で終了した。

(2) 平成 26 年度

平成 26 年度は、筆者が担当した体験授業は 6 回である。そのうち、「ようこそ、夏祭りへ」では、学園の行事との同時開催であったので、学生サポーターだけではなく、短大生の活動を直接知ることになり、行事をとおして短大の雰囲気を大いに感じ取らせた。「生活」では、日本における年中行事についても学ぶので、オープンキャンパスと同時開催の学園行事を積極的に取り入れ、そこでの行事の意味を知らせるとともに、少しでも自分自身を取り巻くさまざまなできごとに気付くことを体験させていった。夏祭りや大学祭の行事には「生活」の体験授業を意図的に開催して、大学全体の普段かかわらないような人たちとも接し、さらには地域の人たちとの交流を体験させるようにした。

体験授業の目的は、学園の行事（夏祭り）を体験し、参加者同士で楽しむことである。また、短大生とのコミュニケーションを積極的に取ってみること（コミュニケーション力）であった。体験授業内容は、愛知県の祭りについて調査することと、学園の行事である夏祭りを有意義に楽しく過ごすために、見てみたいところを話し合うことであった。

授業の導入は、SGE でコミュニケーションを取り、体験授業をきっかけに参加者同士が仲良く過ごせるような意識付けを行った。次に、夏祭りが地元で行われているか調べ、祭りの意味について考えさせた。さらに、当日開催される学園行事でもある「夏祭り」への参加について話し合わせた。興味のある出し物や模擬店について意見を出し合い、和気あいあいとした明るい雰囲気で体験授業が進んだ。

(3) 平成 27 年度

平成 27 年度は、筆者が担当した体験授業は 3 回である。そのうち、「雨の日の楽しい過ごし方」では、保育者は園庭で遊べない場合、どのような工夫をして室内での過ごし方をチーム内で考え、

身近にある新聞紙を使ってチームで協力しているか想定し、実際に体験してみた。

体験授業の目的は、雨の日の遊びをチームで考え、実際に遊びを体験し、仲間と協力して楽しく遊べる工夫をする（チームワーク）であった。内容は、新聞紙を使い、チームで相談をして、遊び方を考え、実際に体験をした。5つのグループには学生サポーターと子ども学科の教員が入り、グループ活動では学生サポーターを中心に話し合いを進めた。教員は話し合いが止まったり迷走してしまったりした場合には修正をする程度で、学生サポーターや参加者と同様に楽しんだ。

授業の導入は、チームのメンバーに対して自己紹介を行った。次に、雨の日に園内での室内遊びにはどのようなものがあるのかをグループで話し合った。その後、グループ対抗で新聞紙を使ったジグソーパズルに挑戦した。複数の新聞紙を選ばせ、選んだ新聞紙をリーダー（本時では筆者）が8～10のピースに分け、グループの人数分をランダムに混ぜ合わせ、中央部分に置いた。それらをいくつか組み合わせて、1枚の新聞紙に戻すゲームを行った。複数の目で新聞紙のピースを選び、ジグソーパズルのピースを組み合わせていった。チームワーク力が試されるのだが、楽しくメンバーと話し合いながら組み合わせていけば良い。時間内に新聞紙に戻ったグループには、賞賛の拍手を送った。仲間と力を合わせることが大事なので、協力して体験できたという自己申告のあったグループにも拍手が送られた。ゲーム後は、散らかった新聞紙を協力して片付けるところまでを参加者、学生サポーター、教員全員で行うことができた。

学生サポーターだけでなく教員もグループに入ったので、その後のランチタイムや個別相談にも教員との協働として好印象であった。参加者とのつながりを深めたため、チームワークのねらいが体験授業後にも活かされていることが明らかになった。

（4）参加者の自由記述

参加者からの声は、以下のとおりである。

平成25年度「先輩幼稚園の先生のお話を聞こう」では、「先輩の話聞いてためになった」、「この短大に入学したい。そして幼稚園の先生になりたいと思った」、「授業が楽しかった」など、保育の道に興味を持っていると思われる感想があり、体験授業での卒業生をゲストに招いたことが参加者の心に響いたことが明らかになった。

平成26年度「ようこそ、夏祭りへ」では、「お祭りの意味を初めて知った」、「夏祭りで、どこを回るのかを考えて楽しかった」、「一緒に参加した人と仲良く相談できた」など、学園行事にも関心を持てたことがわかった。同じ目的のもと、自分の意見と相手の意見をすり合わせて、どうしたら楽しく過ごせるのかを考えていくうちに、コミュニケーションが円滑に取れるようになっていた。

平成27年度「雨の日の楽しい過ごし方」では、参加者からは、「難しかったが、グループの人と相談してパズルを完成させて楽しかった」、「知らない人とも仲良くなれた」、「先輩や先生たちと楽しくできた」など、グループ内での信頼関係が生まれ、チームワーク良く体験活動ができたことがわかった。

これらの感想から、興味関心を持ってオープンキャンパスに参加し、体験授業を中心にして保育について考えるきっかけになった。また、保護者同伴の場合は、保護者の視点で大学を見て回ってもらった。好印象が持てた保護者が大半であった。

2. 参加者と学生サポーター、卒業生との交流

(1) 学生サポーター

オープンキャンパスでは、学生サポーターの位置づけが重要であると考えられる。大学というものを参加者に実感させるには、年齢に近い学生サポーターは身近な存在になる。子ども学科の学生サポーターも参加者と同様、将来保育者になりたいと思い、本学へ入学した学生である。登録している学生サポーターは1年生がほとんどである。「1年前、自分がオープンキャンパスで学生サポーターにお世話になったので、入学したあかつきにはぜひとも学生サポーターとして、参加者とかかわりたい」という思いで登録している。平成26年度の「ようこそ、夏祭りへ」では、「夏祭り」自体が初めての体験だったので、参加者とともに学びながら学生サポーターとしての活動もこなしていった。

米谷⁽¹⁷⁾は、「保育の現場では、『笑顔』と『素直な心』を忘れないでください」と述べている。保育者に限らず、どのような職場で働くことになっても、人と接する場合は、笑顔が不可欠である。笑顔は、周りの空気を柔らかくしてくれるような温かみがあり、保育者の場合は、子どもたちだけではなく、保護者へも安心感やさらには信頼する気持ちへとつながっていくものである。また、子どもや保護者と接するときに、偏見を持たず、どのような状況であっても、好意的に対応するという素直な心を持つことがたくさんの学びを得ることにつながっていく。林田⁽¹⁸⁾は、「こちらが素直でありさえすれば、相手の印象もよくなります。」と述べているように、参加者が短大に対して好印象を持つためには、特別に難しいことを行うというよりも、日頃から心がけて磨いていけばできることである。この笑顔と素直な心については、オープンキャンパスでの学生サポーターという役割にも当てはまることであるので、進んで実践するように指導をしている。

小島⁽¹⁹⁾は、「『在学生』が鍵になると考えている。在学生の姿を通して、雰囲気や魅力といった、参加者個人の感受性に拠るものも含めて、数値や言葉で表すことのできない大学が持つ本当の力が伝えられると考えている。」と述べているように、学生サポーターから伝わるものは、オープンキャンパスに参加する参加者本人と保護者には確実に伝わるものだと考える。プラス面、マイナス面の両面が伝わる学生サポーターの対応なので、さまざまな場面で活躍できるようになるための指導は必要である。

学生サポーターの育成は、学生自身の成長にもつながると考える。普段は、人から言われたことを中心に物事を進めている生活が大半であるが、オープンキャンパスでの業務は、教員が指導するとは言え、参加者のニーズに応えていかなければならない。学生サポーターは自分で考え判断し、行動するのだが、その根底にある思いは、参加者サイドに立って、もてなすことになる。学生サポーターの温かい振る舞いや言葉遣いなどの接し方は、参加者に伝わるものであり、オー

ブンキャンパス事業以前に身に付けておくべきことである。

以下に、受付での例を挙げてみる。言葉だけで参加者へ説明をするのではなく、受付表を記入する場所まで案内、記入し終わったら提出場所まで再び案内をするなど、緊張感を持って来校してきた参加者側に立っての対応を心がけるのは、指導を受けた部分だけという事務的な対応ではなく、その場その場での臨機応変な対応が必要である。学生サポーターがまだ不慣れな場合は、教員がまず模範を示し、具体的にこの場合はこのように行くと教え、次の場面で早速対応させるなどして、少しずつ自信を持たせる。自信を持って参加者への対応ができるようになれば、ますます自然な「笑顔」と「素直さ」ができるからである。

また、午後からの個別相談においても、学生サポーターの役割は重大である。朝の緊張感がほぐれて、参加者同士や参加者と学生サポーターや教員との人間関係が深まってきた時には、さらなる温かい対応が必要である。小山⁽²⁰⁾の大学でも行っている「カフェテリアで行われている『在校生との交流』」では、具体的に飲み物を提供し、大学のマークの入ったお菓子や手書きのメッセージカードなどを渡していた。本学では、個別相談時での飲み物を、参加者に選ばせている。朝から対応をしていない学生サポーターが、その日初めて対応する参加者だとしても、飲み物を持っていったことをきっかけにして、話し相手になればお互いが温かい雰囲気では話が進むこともある。ひと声かけるタイミングは学生サポーター自身が見つけることであるが、笑顔での挨拶、素直な気持ちで参加者に接する気持ちで対応していけば、自然と受け入れられるものである。話題に関しても短大についての話は当然であるが、参加者との共通の話題を学生サポーターが拾い出すことも、サポーターとしての役割のひとつになる。林田⁽²¹⁾は、「心くばりができる、…（中略）…そのためのツールとして活用したいのが『情報』です。」と述べているように、参加者と年齢の近い学生サポーターと共通の話題、情報をきっかけにして人間関係をその場だけにとどまらずに、繰り返し参加者が足を運んでくれるようなオープンキャンパスを開き、そして、入学につなげていくためにも、学生サポーターの業務は欠かせないものである。小山⁽²²⁾は、「多様化する来場者への対応方法やアイデアを紹介することでサポーターズのホスピタリティマインドにポジティブな影響を与える」と述べ、好印象を参加者へ与える対応方法を身に付けるということは、学生サポーター業務をきっかけにして、学生サポーター自身が大学生活にも生きてくる。橋本ら⁽²³⁾は、「学生の活躍は大学の魅力をオープンキャンパスの参加者に伝える方法として有効であることも確認できた。」と述べ、学生サポーターの業務自体、学生の大学教育の場とするためには、教職員の指導・支援が重要である。いずれは、学生サポーターが主体的にオープンキャンパスの企画や運営を行っていくためには、教員が学生サポーターの対応などを指導し、小さな成功体験を多く積みませ、学生一人一人を承認やサポートをしていくことが必要であろう。

(2) ゲストスピーカーとしての卒業生

体験授業のプログラムを考える上で年に1回卒業生をゲストとして招くことにした。まだ、5期生までしか卒業生を輩出していないが、新任1年目の卒業生を招き、在学中の思い出や保育者

としての現在を語らせている。卒業生自身の成長を自らも感じとり、現職の先生として、明日からの仕事の励みになるような体験を、卒業生自身も協働をとおして実感できるように、参加者とのかかわり方を体験授業内で設定していった。毎年1回は卒業生をゲストスピーカーとして体験談を話させている。卒業生が参加者に話をする機会は、この他にはほとんどない。

池上⁽²⁴⁾は、「自分がおもしろいと思わないことを他人に伝えても、普通は、他人もおもしろいとは思わないからです。そのためにも、おもしろいところを自分なりに探していきましょう。」と述べている。園児や保護者からすでに「先生」と呼ばれている卒業生たちには、体験を話すことによって、参加者とのコミュニケーションを図っている。参加者の反応から、今の自分の仕事ぶりや思いや考えが伝わっているか理解ができる。

平成25年度の「先輩幼稚園の先生のお話を聞こう」では、インタビュー質問に回答していく過程で、卒業生自身が自分の仕事ぶりをふり返り、未来への希望につなげていた。予期しない質問に笑いが起こったり、卒業生が真摯に答えたりする様子を見ていると、幼稚園の先生として子どもたちのために一生懸命な仕事ぶりが伝わってきた。

経験年数が長い卒業生は、体験談の依頼に積極的に応じてくれるが、初任者は「何を話せばいい?」、「緊張してうまく話せない」、「別の人がいるんじゃないの」とマイナス思考で返答してくる。古閑⁽²⁵⁾は、「先輩の言葉や意見を身近なものとして捉える傾向が強い。」と述べ、依頼の時には、参加者や学生サポーター役の在學生に話すことによって、自分自身が学ぶ場として活用でき、有効な取り組みの一つであることを伝えている。また、依頼した卒業生へは事前に、このようなことについて回答を考えてきてほしいと依頼すると、自分なりに考えてくる。もちろん、普段は園児相手だが、高校生以上を相手にするのだから、どんな話し方で、何を話せばいいのか、不安を多少なりとも持つことは理解した上で、こちらも依頼するのである。人に話すことによって、自分自身の仕事をふり返るいい機会だからと一言付け加えて依頼している。

先輩談を依頼した複数の卒業生は、その日が初対面になる場合もある。もちろん、学生時代に仲が良かったこともあるが、就職してからなかなか連絡もとれず、久しぶりに会って話せてしかもプライベートのやりとりではなく、仕事上の話について聞く内容であるため、普段感じられなかった友人の先生ぶりを感じ取ることができる。それは、ある意味新鮮な話題であり、友人であるが、一人の保育者として相手を見るきっかけにもなり、体験授業が終了してからの卒業生同士の会話は、弾むものであった。あれほど、マイナス思考で不安を前面に出していたが、体験談を話したり質問に答えたりを繰り返すと、それぞれが先生の表情になり、プライドと責任感がこちらにも伝わるほど、熱のこもった体験授業のプログラムになった。次回もこのような機会があれば依頼してもよいかと筆者が尋ねると、マイナス思考の返答は一つもなく、「お役に立てればいつでも来ます」とプラス思考に変わっていたのである。

以上の結果から、保育の魅力を知ってもらうための体験授業としては、参加者同士の交流の活性化につながる指導が展開されたことが明らかになった。参加者が本学で学びたいと決定づけるような指導のプログラムを計画し、実践していくことの重要性を改めて感じた。また、参加者同

士の交流も、体験授業がきっかけになることがほとんどであり、学生サポーターや教員、卒業生ともかわる手立てとしては指導プログラムが効果的であった。さらに、学生サポーターや卒業生自身の成長につながる体験授業であったことも明確になった。

V 考察

本研究は、オープンキャンパスにおいて、参加者同士の交流を活発にすることと、参加者との交流を深めるために、学生サポーターや教職員、卒業生などと協働して指導プログラムの効果について検証することであった。

研究の成果としては、体験授業では活動を中心に、参加者の交流を活性化するプログラム構成は効果があった。それは、参加者がこの短大で学びたい、入学するという意思が固まっていく過程を、繰り返し通う参加者の姿で明らかになった。また、初めて参加した参加者の感想からも好印象のコメントが多数あった。時には、卒業生でもある先輩現役先生に登場させるなどのプログラムを設定することによって、将来の保育者として、参加者自身がキャリアをデザインしていく力が身に付いていると考える。また、学生サポーターが参加者とふれあうことによって、教職員とともにオープンキャンパスを運営しているという、協働体験も得ることができた。大学進学や就職だけにとどまらず、人生を考えていくきっかけにもなっていくような、オープンキャンパスでの体験授業を位置づけていくためにも、進学してからの学修へスムーズに移行できるような魅力ある体験授業を考えていく必要がある。

参加者は漠然と子どもが好きだからという理由で、保育者になりたいと考えていた。この考えは学生の中にも多く、就職活動が始まってから、「何になりたいのかわからない」と言い出す学生も中にはいる。漠然とした思いは、例えば実習期間にうまくいかなくなってしまうと、保育者になることを諦めると安易に判断してしまう。困難にあったとしても、働けばそのような状況は数知れず遭遇することになり、そのたびに辞めることを考え諦めてしまえば、人生を考えていくエネルギーをも失いかねない。それは、イメージとしての保育者像しか、持ち合わせていないために起こってしまうのだろう。

将来に対しての夢や希望に向かって歩んでいくためには、モデルになりうる人物が必要である。Albert Bandura⁽²⁶⁾が提唱した社会的学習理論に関するキーワードにもある「モデリング」である。自分以外の人（体験授業では卒業生）が、保育者として適応していることを知ることで、自分も保育の職業が適していると考えることにつながることである。

体験授業から明らかになったこととして、人との交流、いわゆるコミュニケーションを円滑に取ることができていた。これらの結果は数値で表すのではなく、参加者の表情や発言などで明らかになっていくものである。オープンキャンパスの受付時で参加者は、若干、緊張した面持ちであっても、体験授業をきっかけにして、参加者同士が親しくなれる時間でもあった。また、学生

サポーターや教員とも親睦を深めるチャンスでもあり、保育への興味を明確にさせ、参加者の気持ちを引きつけて本学の魅力を最大限に感じさせるようにした。体験授業を通じて本学の良さを伝えるようにするには、やはり授業者でもある教員の役目や責任は大きいものである。

参加者は複数の大学でのオープンキャンパスへ参加し、どこで学ぶことが自分の将来につながりやすいのかを比較しながら見ているものである。「この大学は他大学とは違う、入学して、将来、保育者になりたくなった」という印象を持たせる必要があるのだ。

将来、本学へ入学し、保育者の資格を取得し保育者として働こうと考えている参加者へ、先輩として先輩談を話す機会は、卒業生にとっても仕事内容、自分の思いや考えなどをふり返る良い機会であった。また、卒業生が参加者へ話すことによって自分自身がどんなことを大切にしていたのか、今後の課題は何か、楽しい、おもしろいと感じるのはどんなことか、興味のあること、やってみたいことは何なのか、などを明確にすることができた。

先行研究の池島らが述べたように、どのような方法で本学の魅力を表現するのかは当然のことのように思われるが、体験授業において本研究の結果が明確にしているように指導プログラムは参加者の交流を活性化するうえで効果的だった。したがって、いかに体験授業に参加させるのか、そのためにいかに本学のオープンキャンパスを知らせるのが重要なポイントであると考え。本学の入試広報室の職員は、精力的に高等学校等に出向いての広報活動を行っている。教員も高等学校等での出前授業を担当するなど、より多くの生徒がオープンキャンパスに来るような働きかけを行っている。コマーシャルを流す、新聞広告に載せる、公共交通機関等にポスターを掲載するなどの対応は今までも講じてきた。筆者も講演会等のチラシには本学の名前を必ず載せている。しかしながら、オープンキャンパスに足を運ばせるためには、他大学との確かな差をつけるためにさらなる検証をしていくことが必要であると考え。

VI まとめ

本学のオープンキャンパスは、教育理念にかなった内容で毎回開催している。大学側からの視点で捉えれば、入試につなげる重要な役割である。参加者からの視点で捉えれば、入学後の学生生活に対しても影響が大きいことである。特に、保育者をめざす参加者へは、人間形成の大事な時期にかかわっていく職業であるので、しっかりと学ぶという姿勢を鮮明に自覚させる。そのためには体験授業の展開を工夫していく必要がある。そして、参加者が多くの人との交流を深めていくことも大切である。

オープンキャンパスにおける体験授業は、参加者の交流を活性化しただけでなく、学生サポーターや卒業生までも効果的だったことが明らかになった。形式的な説明を聞くよりも、卒業生の体験を聞いて、参加者自身がさらに進学について将来をデザインしながら考えさせるきっかけになっていることも明らかになった。卒業生とのやり取りから肯定的な考えを持てるようになって

たことも確かであった。参加者同士、学生サポーターや教職員、卒業生とのかかわりの中で、魅力ある大学として良い印象を持たせたと確信している。

今後の課題として二点挙げる。一点目は、現在も取り組んでいる点ではあるが、本学の知名度を今以上に上げて、オープンキャンパスへ足を運ばせるような明確なプランを今一度再検証していくことである。二点目は、保育者という専門性の理解を、高校生や受験生の時期からも意識付けを促すためには、参加者の興味や関心が高かった体験活動場面とともに、保育の理論面も学ぶプログラムとキャリア教育を考慮したオープンキャンパスの取り組みの必要性である。

【註・参考文献】

- (1) 内閣府「我が国の人口動態の推移と将来予測」
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../01/.../1354019_3.pdf 2015/11/29
- (2) 株式会社ライセンスアカデミー「進路情報研究センター調査レポート Vol.10
shinronavi.com/cms/attachment/103/ 2015/11/29
- (3) 文部科学省「短期大学の今後の在り方について」(審議まとめ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1351962.htm 2015/11/29
- (4) 池島明子、横井光治、岩井恵子「人と交流するプログラムを取り入れたオープンキャンパスの効果」大阪体育大学短期大学部紀要 第8号 2007 pp.85-99
- (5) 橋本佳美、鈴木真理子、田中高政、堀内ふき、キシ・ケイコ・イマイ「インフォーマルな大学教育としてのオープンキャンパス ―学生の社会性育成のために―」佐久大学看護研究雑誌 3巻 1号 2011 pp.53-60
- (6) 古閑博美「キャリア教育への一考察 ～入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用～」嘉悦大学研究論集第51巻第1号通巻92号 2008 pp.145-161
- (7) 小山知子「大学広報におけるホスピタリティの理論と実践」多摩大学紀 Vol.6 2014 pp.75-88
- (8) 小島理絵「オープンキャンパス考―上―大学の何を伝えるかオープンキャンパスの成り立ち」日本私立大学協会 教育学術オンライン 第2402号 2010
- (9) 名古屋経営短期大学「平成27年度入学生用学生便覧」2015
- (10) 同上 p.2
- (11) 名古屋経営短期大学 <http://www.jc.nagoya-su.ac.jp/> 2015/11/29
- (12) 前掲 池島明子、横井光治、岩井恵子「人と交流するプログラムを取り入れたオープンキャンパスの効果」
- (13) 前掲 小山知子「大学広報におけるホスピタリティの理論と実践」
- (14) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」2008
- (15) 前掲 古閑博美「キャリア教育への一考察 ～入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用～」
- (16) 片野智治「ペンネーム」國分康孝・國分久子「校生のグループエンカウンター」図書文化 2005 pp.532-533
- (17) 米谷美和子、福田勝恵「キラッと光る保育者のマナー」ひかりのくに 2010 p.10
- (18) 林田正光「リッツ・カールトンで学んだ仕事でいちばん大事なこと」あさ出版 2008 p.132
- (19) 前掲 小島理絵「オープンキャンパス考 ―上― 大学の何を伝えるか オープンキャンパスの成り立ち」
- (20) 前掲 小山知子「大学広報におけるホスピタリティの理論と実践」
- (21) 前掲 林田正光「リッツ・カールトンで学んだ仕事でいちばん大事なこと」 pp.151-152
- (22) 前掲 小山知子「大学広報におけるホスピタリティの理論と実践」
- (23) 前掲 橋本佳美、鈴木真理子、田中高政、堀内ふき、キシ・ケイコ・イマイ「インフォーマルな大学教育としてのオープンキャンパス ―学生の社会性育成のために―」
- (24) 池上彰「伝える力」PHP ビジネス新書 2010 p.45
- (25) 前掲 古閑博美「キャリア教育への一考察 ～入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用～」
- (26) Albert Bandura カナダ人の心理学者。「社会的学習理論」、「自己効力感」で広く知られている。

(名古屋経営短期大学 子ども学科 講師)